

平成23年度四手井綱英記念賞 選考理由

授賞対象論文

平松和也・内藤 馨，2009，淀川城北ワンド群の魚類群集の変遷．関西自然保護機構会誌，31（1）：57－70．

選考理由

淀川城北ワンド群は，数多くの淡水魚，なかでもイタセンパラを始めとする多くの絶滅危惧種の生息が確認されており，淀川水系あるいは国内で最も貴重かつ特異な淡水魚の生息場所の1つである。本論文は，この淀川城北ワンド群の魚類群集の変遷について，水生生物センターが1970年初頭から淀川全域において10年毎に実施してきた4回の魚類調査結果のうち，本ワンド群のデータを分析したものである。

著者らは，過去4回の調査でのべ36分類群が確認されたのに対して，2004年にはオオクチバス，ブルーギルなどの外来魚の数が急増し，それに呼応するようにイタセンパラ，タモロコ属，ハスなどが激減したことを明らかにしている。この調査結果は，外来種の急激な増加と一部在来種の激減が短期間のうちに生じることを明白に示すものである。

1990年以降の本ワンド群における魚類群集の激変をもたらしている要因について，論文では大きく2つの点をあげている。1つは，淀川大堰の1983年からの運用にともなうワンドと本流との接続頻度の減少，ワンド底泥堆積の増加という水質や底質の環境変化であり，もう1つはオオクチバス，ブルーギルに代表される外来魚の増加がもたらす生態的影響である。

この二大要因について，著者らは対策が何ら講じられない場合，これら外来魚の影響がさらに増加することを指摘し，また淀川大堰運用以前のような水利での攪乱効果の再現が急務であることを提言している。過去40年間にわたる魚類群集の変遷を把握したこのような研究は希有であり，本論文の価値は極めて高く貴重なものといえる。さらに本論文が明らかにした過去の城北ワンド群での魚類群集の変遷は，今後の本ワンド群の保全を進める上でも貴重な資料となり得る。

以上のことから，本誌第31巻1号に掲載された論文「淀川城北ワンド群の魚類群集の変遷」を高く評価し，平成23年度四手井綱英記念賞を授与する。

関西自然保護機構編集委員会
四手井賞選考委員会